
方言

乃崎アラレ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

方言

【Nコード】

N9885E

【作者名】

乃崎アラレ

【あらすじ】

大阪の方言が嫌いな東京生まれの俺。そんな俺の前に大阪からの転校生の女がきた。はじめは拒絶し続ける俺だったけど……？

俺と真と女とあいつ（前書き）

こんにちは、乃崎アラレです。

いつも違うサイトでファンタジーばっか

書いてるんですが、今回は恋愛小説にチャレンジしてみました。

読みにくい点もあるかと思いますが、

どうか完結までお読みいただけたら光栄です。

俺と真と女とあいつ

くプロローグく

東京。

大阪。

同じ日本だというのに、
全くと言っていいほど違う。

「大阪人」が「東京人」に話しかけると、
「東京人」は、「大阪人」って田舎モノだね。
と、笑う。

「東京人」が「大阪人」に話しかけても、
「大阪人」は、「東京人」ってかっこつけやろ。
と、笑う。

その笑いは、どちらも冷たい軽蔑の笑い。

方言の違いで生まれる、軽蔑、差別。

その壁を乗り越えてきた、

大阪女子。

東京男子。

その二人の恋愛物語。

※

ここは東京。
都会。

人であふれかえった街。

流行とか、そんなものに敏感なところ。

いやでも流行に流され：

みな同じ。個性のないところ。

そんな街に生まれて育ってきた俺。

もう東京の習慣が体に染み付いた。

個性の尊重なんて言葉、俺らにはない。

俺らの流行と違う方向に向いた奴を、
何でもかんでも「ダサイ」と決め付け、あざ笑う。

そこが、俺らの街。

星龍高校1年。小林 陽。男。

今はまだ、
こんなに純粹で、こんなに切ない気持ちになるなんて、
思いもしてなかった。

俺らの通ってる、私立星龍高校は、わりと有名で、

他県からも生徒が通ってくる。

その中でも多いのが、

大阪、京都。

「くやねん」とか「くやろ」と言ってやがるかずうずうしい県の奴らが

意外と賢いのでおれはちよつと迷惑。

自分勝手？俺らの街に自分勝手じゃない奴なんていない。

俺が自分勝手だって思ってる奴はいいやつだね。

俺は俺のやり方で毎日を生きている。

だから自分勝手に別にいい。

自分勝手上等！みたいな？

……と、余談はこのくらいにして、

たしか先生が昨日、

「明日は転校生が来るから」とか何とかいってた気がする。

大阪とか京都の奴じゃなかったらいいんだけどな。

別になんとも思わずに、昨日と同じ気持ちで
学校に向かう。

「よっ！」

突然頭を小突かれてふり向いた。

「……真かよ。つまんねー」

幼稚園からのダチ。木下 真。

腐れ縁というものなのだろうか、俺らはいつも一緒だ。

「つまんねーとは何事だよ。

せっかく俺様がお前ごときに挨拶してやったんだぞ」

そういつてニカニカと笑いやる。

うぜー。

まあ、どーでもいいけど。

「それよりさ、今日の転校生女の子のらしいぞ」

真がわざと深刻そうな顔でいう。

「ふーん」

そして俺はわざとしけた面で答える。

「ふーん、じゃねえだろっつ。

よく聞けよ、その女の子、大阪の子だってよ！やっほーい」

真は飛び跳ねている。俺ははあっつ！？と猛抗議。

「大阪とかやべえくらい田舎じゃね？おまけにうぜえし調子乗ってんじゃねーよ！何で大阪なわけ？」

俺がそう言うと

未だ飛び跳ねている真は言う。

「でもよ、大阪のほうがしつかりしてるって言うか、いい子が多いんだよ。ま、お前には興味ないと思うけど。ってことで俺はその女の子の顔を拝みに先行ってます！」

そういつて、学校に走ってしまった。

取り残された俺は、近くの電信棒を軽く蹴った。

（なんで、大阪なわけ…）

まあ俺はそいつとはかかわんなきゃいいわけだし、どーでもいいか。

と、口笛を吹きながら学校へ向かった。

※

教室に入ると、いつものとおり、クラスは5・6組くらいのグループに分かれていた。

といっても、俺が一つ声をかけるとみんな俺に従ってくる。

俺はこのクラスの権力を握っている。

はつきり言って、俺に逆らえる奴は、

真以外、誰もいない。

俺に逆らった奴は、罰を受けなければならない。

あ、女子の場合は特別に無しだけど、みんなからは嫌われる。

でも俺は、みんなが俺に従うのを望んでるわけじゃない。

それに、罰を受けることも、俺が決めたことじゃない。

俺は、何故俺がクラスの権力を握っているかさえ分からない。

でも、意外と楽しいから、このクラスを自分のものに出来るなんて楽しいことだから、

この権力を誰かに譲ろうとなんて、しない。

いつの間にか、予鈴がなって、みんなが席に着いた。数分して、先生が入ってきた。

あ？今日の日直俺かよ。

機嫌悪そうに立ち上がって、一言。

「きりーっ、きょーっつけー
れーっーっーい」

俺がそう言うと、周りの奴らは、

「おーはよーーーーーございまーーす」

とだらしく答える。

先生が怒つた。

「おい、小林、やり直せ」

「へーい、すいませーん」

軽く頭を下げてもう一度立ち上がる。

「起立！！きょうつけ！！礼！！！！！！」

すると、周りは

「おはようございます!!」

と、きりつと答える。

先生は一人でウケている。

ばかか、コイツ。

ため息をついていすに座ると、先生は一人咳払いをして、生徒のほうに向き直った。

「今日は転校生を紹介するぞ。さ、明野。入りなさい」

先生がドアのほうに向かって手招きした。
すると、ショートカットの女が教室に入ってきた。

「今日から1年2組でお世話になる、

明野 美雪 います。よろしく願います」

大阪独特のなまりで話すコイツ。

田舎くせーー。

まあコイツにも俺にしたがってもらおうと。

人からハミられるの、大阪の奴きらいだな。たぶん。

どうせ、大阪人だって、東京と似たようなものだろう。

そんなことを考えていると、先生が口を開いた。

「えー。明野さんは、

はるばる大阪からこの学校に入学しました。

みなさん、仲良くしてやれよ。以上」

みんな、はーい。と、答えていた。

俺は、何も言わない。

わりと明るい雰囲気の中、

俺はなんとなく真のほうを見た。

なんだ?…あいつ。

なんであんなに驚いた表情してるんだろう……

「み…ゆき…?」

へ?なんで下の名前であの女の名前読んでるわけ???

意味わかんねえよ。

なんかわけありってかんじだよなあ……

後で聞いてみよう。

と、前を向き直った。すると、その明野っていう女も、驚いた表情をしていた。

「しん…」

クチパクでそういつてるのがわかった。

こいつらどういう関係なんだ??

早く休み時間になってくれねえかなあ?

キンコーン…

休み時間のチャイムになる。

俺はガバツと立ち上がって、真のもとへ向かった。

「なあ、真、あの明野ってやつ

「お前となんか関係あんのか？」

聞くと、真は笑いながら言った。

「……俺の元カノが転校してきやがった」と、頭をかく。

は？ 真の元カノ？

「いやあ……もう未練とかはねえんだけど
きまずいだろうがあ……」

悲しそうに言った。その表情は、もう未練がないようには見えなかった。

「嘘つくなよ。まだ未練あんだろ」

「……………ちょっとだけ」

「……そっか」

そういつて、俺はこれ以上何もいえなくなり、自分の席に戻って机に落書きをしていた。

すると、明野ってやつが真のほうへ向かう姿が、目に映った。

「真……ちょっと……ええかな？？」

「ん……」

二人で並んで教室を出て行くのが見えた。

それを見ていたクラスの連中は、

「もしかしてあいづらできてる?？」

とか何とか言って、

「おいかけよーぜ!!」

といいながら、教室を出ようとした。

「行くなって!!」

俺が一括すると、みんなしぶしぶ元の場所に戻った。

そして、みんなが目を離したすきに、俺は教室を出て、
真の後を追った。

うわぁ：俺ってマジ自分勝手〜。

まあ、自分勝手って言っても、これが俺のやり方だし。

別にいい。

さあ、そんなことはもう置いておいて、

廊下を出て辺りを見回すと、

被服室の前ところで、真と明野は話していた。

俺は階段のすぐそばにあった柱の影に隠れた。

俺……忍者みたい。

静かにしていると、真が口を開いた。

「どういう風の吹き回しだよ」
ぶっきらぼうに呟く。

明野の口調ははっきりしていた。

「アンタに会いたくて来たわけとちゃうから。
しかも、あたしアンタがここに入学してるなんて
知らなかったし……勘違いせんとして」

明野か真のどちらかが深いため息をついた。
たぶん真。

もう一度今度は明野だろう。

短いため息を付いた後、明野がさっきより大きな声で言った。

「言いたいことはそれだけ。

より戻すとか思ってたへんし。じゃ」

そう言う明野はきびすを返して教室のほう、つまり俺のほうに向
かって歩いてきた。

やべえ……見られる。

どうしようもなく立ち尽くしているのもなんなので、
顔を下に向けて手をいじっていた。

女みてえ……。俺。

足音がなくなったので、恐る恐る顔をあげてみた。

そこにたっているのは教室へ戻ったはずの明野。

冷たい顔で俺をにらんでいた。

「……何スパイみたいなことしてんの。最悪」

それだけ言うと、明野は教室へ戻った。

……なんだあいつ。

なんかムカつく。

……………。

俺の嫌いな人間。

男とか女とか関係なく、

俺のやり方に従わない奴は、嫌い。

俺に逆らう奴が嫌い。

だから、なんか俺に反抗的な、

明野がムカつく。

あいつ、絶対クラスで浮く。

俺が浮かしてやる。

ま、そんなことが出来るのは俺しかいねえんだけどな。

教室へ戻ると、明野は無言で本を読んでいた。

なんか、ムカついた。

行動がムカつくんじゃない。明野自体がムカついた。

なんでだろ。ってか、何で俺こんなに明野のこと
気にかけてるんだよ。

ばからしい。

そう思い、机の上でぼーっとしていたら、
教室のドアが開き、真が入ってきた。

別に何事もなかったかのように平気な顔をしている。

でも、少しだけ、目が赤かった。

泣いたのか？

こんな奴のために？

泣いたのか？

「おい、陽」

突然名前を呼ばれて、驚く。

「あ？　なんだあ？」

答えると、真は俺のほうによってきて、呟いた。

「もう未練はねえ」

その顔は、笑っていた。

本当に未練のない、すがすがしい顔だった。

俺にはまねできないような、笑顔だった。

俺はそれがちよっとムカついて、うらやましくて、真の頬を、ペチンと、軽くたたいた。

「はゝあ。恋する男かつ!!」

あ、間違えた。

恋したけど振られてしまった男のすがすがしい笑顔とでも言っておいてやろう。

っーか、男泣きとかお前、やるなあ」

俺が言うと、真は一言、

「素直じゃねえなあ」

と、呟いた。

明野をチラッと見ると、

冷たいまなざしで、こっちを見ていた。

キンコーンカーンコーン……

それをかき消すように、休み時間終了のチャイム。

理科の移動教室。

だりい。

明野はさっさと一人で教室を出て行った。

あ、また俺明野のほう見た。

なんなんだよ、全く。

「真、行こーぜー」

「おー」

俺らは一番遅く、教室を出て理科室まで行った。

理科室に入ると、独特のにおいが俺の鼻を襲った。

「うっつ…くせえっつ…」

どうも理科室のにおいだけは好きになれない。

なんか硫黄とかなんやらの薬品の入り混じってそれで尚、さびたにおいとか机のにおいとかがぐちゃぐちゃと混じったこのにおい。

うえ。まじくせえよ……

制服の袖できつく鼻を押さえながら席に着……こうとしたその時、

「えー。転校生の方も入ってきたことですか？
席替えをしましょう」

と、先生が突然高い声を出した。

「ただし？条件がありますう。

席替えの基準は、背の順ってことにしますね。

はい、移動!!」

は??なんだこの先生。て言うか、なんでオネエ言葉?

背の順とか……。

まあいいや。

俺はこのクラスで一番背が高い。

そして、このクラスで一番背の高い女子は、
学年1の美少女。そして、俺の彼女。
道具に近いけど。

まあ良くも悪くもない席順だな。
と、思っていた……。

俺の隣に彼女が来た。

皆本 茜。まだ顔を見るのはもったいないので、
気づかないふりをしていた。

そして、先生に「57ページ開けて」
といわれたときに、さりげなく

「何ページだっけ？」と、顔を見る。

横を向いて……………

「は？」

俺は、絶句した。あ、違う。「は？」って言ったわ。

俺の隣は、俺の隣は…

明野 美雪。

そういえばこいつ、でかかったっけ？？

茜が斜め前にいる。

神様、なんですか？この展開。

ちよつと、偶然という言葉だけじゃ収まりませんよ。

「ええー！？　ちょ、あたし陽と離れちゃったじゃん、席。
意味わかんない！！」

茜がヒステリックな声を上げる。

「うっせえんだよ、皆本。別れてえのか」
いつもは茜って呼んでいるのに、苗字で呼んだことで、
茜にちよつとだけ不安が生まれたらしい。

そうじゃなくて、単純に、別れたくないだけなのか…。

まあどっちでもいいけれど、茜はしゅんと、静かになった。

隣で明野がハアツとため息をついた。

「なんだよ。なんか文句あるわけ？」
明野の行動になんかムカついた。

「うちがため息つこうがつかまいが、
アンタに関係ないやろ」
明野は冷静だった。

みんなが明野のほうを振り返る。

俺に、逆らったから。

「逆らうわけ？　俺に」

俺が少し興奮気味に呟いた。

明野は顔色一つ変えずに、一言言った。

「逆らう？……うちは、アンタみたいな人間が、一番嫌いや」

今まで俺に対して「嫌い」という言葉を使った奴は、使ってから3日で転校していった。

こいつ、入ってきたばかりなのに、残念な奴。

まあそれが、罰なんだけどな。

嫌いなんで言わなけりゃ、こんなことにはならなかったのに。

何事もなかったかのように、授業が始まる。

先生の前では、みんな静かに授業を受ける。

俺は……寝ている。

授業とか受ける気ねえし。

余裕で夢の中。

理科終了のチャイムが鳴って、みんないっせいに教室へ戻る。

俺も真と理科室を出た。

明野は道具の整理をしていて、まだ理科室を出る気配はなかった。俺が教室へ入ると、すでに明野の机が消えていた。

「陽に逆らうんだもん。これくらいの罰は必要よね」

茜がにこやかに言った。

いつでもそうだ。

俺に逆らった奴は、ほとんど茜か真の手によってつぶされていく。

別に俺はそんなこと望んじやいねえけど、楽しいから見てる。

今回は元カノのことだから、真は黙ってそれを見てるだけだった。

「馬鹿だよなー。陽に逆らっちゃまうなんて。

美雪はいつでもそうだった。

おまえみてえなやつが嫌いなんだよ。

権力者みたいなやつ。

人をあざ笑って生きてる奴みたいにな…な？」

呟いた。そしてちょっとだけ笑った。

俺はちょっとおどけて、

「仕方ねえよ。俺はこのクラスの権力者、なんだから」

そう言うとき真は、

「そっか」

とだけため息と一緒に出した。そして続ける。

「もう俺、あいつに未練ねえけど、これだけは言える。

あいつ、たぶん今までお前に逆らってきた奴とは、一味違う。」

一呼吸おいて、小さく、しかし、しっかりと呟いた。

「あいつは、負けねえ」

「それはそれで……楽しいんじゃないか？」

妙に説得力のある真の言葉に少し戸惑いながらも、俺は言った。

あいつはただ単に気が強いだけにしか見えねえ。少なくとも今までに逆らってきた奴は、そうだった

真もそのことはよく知ってるはずなんだが……もしそれを知ってる上で負けなと言っているのだったら、ちよつと面白いことになるかもな……

まあ、これからが楽しみだ。

そんなことを考えていると、教室のドアが開いて明野が入ってきた。

「机ないし」

そう言いながら教室の中へ入ってきた。

「あれえ？知らない人が入ってきてるんだけど！」
茜がわざとらしく叫んだ。

明野は、あ、と呟き、茜のほうへ足を運んだ。

「どちら様ですか？？」

そう茜が聞いたが、その言葉を見殺して明野は言った。

「机、どこ？」

「は？自分で探せばあ？？」

明野は、茜の言葉に全く動じず、もう一度さっきより大きな声で聞いた。

「うっさい。机どこや聞ってるやろ、答え」

この言葉に、茜はひるんだ。

「ち、調子乗ってんじゃないわよ。陽に逆らったくせに

もうクラスの皆はあんたのこと学校の人間って思っていないから」
茜がいくら言っても、明野は淡々としている。

「どうでもええけど、まず机どこで聞いているのが分からんの？」

そう言って、茜の胸ぐらを掴んだ。

そしてもう一言。

「さっさと答え」

「……被服室の前」

「あっそお。どーも」

そう言うとき明野は教室を出て行った。

俺はそれを呆然と見ていた。

真が苦笑している。

真が俺のほうを見て呟いた。

「ほらな？」

これには俺も否定できず、

「お、おう」

と答えた。

しばらくして、明野は机といすを持って戻ってきた。

茜が悔しそうに明野をにらんでいる。

明野は何事もなかったかのように次の授業の準備をしている。

俺の出番かな？

そう思い、席を立って明野の方に向かった。

「……おい」

明野の真正面にたつ。

俺の隣には、茜。

「何」

明野が俺と目もあわせずに答えた。

「あんまり俺の彼女虐めないでほしいんですけど？」
俺は茜の肩を抱いて言う。

茜は嬉しそうだ。

「別に意味なくやってるわけとちゃうから。
そっちがなんにもせんかったらうちも何にもせえへんかった」

明野は冷たいまなざしで俺等を見た。

……ムカつく。

田舎モノのくせに、俺らに逆らうなんて、
マジムカつく。

「出ていけよ。このクラスから」

俺がそう言くと、クラスの全員が、出て行けコールをした。

「「でてけ！でてけ！でてけ！」」

しかし、明野は普通に本か何かを呼んでいた。
全く、動じなかった。

冷静で、興奮のない女だった。

まるで何か辛い過去があったかのように、
感情を表に出さない女だった。

「あんたらに指図される筋合いは無い。
それから、アンタ」

明野は立ち上がり、俺を強くにらんだ。

その瞬間…

バシィイツツ。――――

俺の頬に今まで感じたことのない激痛が走った。

――明野が……俺をビンタした???

「冗談もええ加減にせえよ、このガキ」

クラスが静まり返った。

誰一人、驚いて声を出すことができなかった。

唯一真が、

「あちゃー」

と、また苦笑していた。

「真から聞いたけど、アンタはこのクラスの権力者らしいな。

権力？ 聞いて飽きれるわ。アホちゃう？

人をあざ笑って毎日を過ごすような人間に、クラスの

権力を握る資格みたいなもん、あらへん」

そういつている明野の目は、まっすぐに俺を見つめていた。

綺麗だった。

でも、悲しそうだった。

そう思っても俺は、自分の「プライド」に負けたくなくて、
反発した。

「調子乗ってんじゃねーよ、お前。」

みんな俺の権力に従う。それでみんないいんだから全部丸く収まつてるんだからこれでいいんだよ

悪いことでもあるのかよ。よそものに口出ししてほしくないね」

そう言うとき明野は、一言悲しそうに呟いた。

「そんな事言う、あんたの心が…かなり悪い」
 そう言うとき明野はポロリと涙を一粒だけこぼした。

二粒目は無かった。

この涙の本当の意味を知るのはもっと先のことで……

今の俺には何がなんだかさっぱり分からなくて……

それでも、一つだけ分かったことがあった。

――明野は、強い。

明野のこぼした涙を見て、茜は舞い上がった。

「いやー！ー！」

美雪ちゃん泣いちゃってる～～！

みんなに出て行けって言われたのがそんなにいやだったのお???」

俺はなんだか茜に腹が立った。

明野の涙はそんなに安いものじゃない。

「茜……いや、寝室。

お前はもう俺の女じゃねえからな。
なんかもうお前だるい」

「え…陽……

あたし、陽のためを思っ……」

茜が半泣きですりよってくる。

「……離せよ!!」

そういつて、無理やりうでを振りほどいた。

明野のほうに振り返る。

「何泣いてんだよ。ふざけんな。

調子乗るな。

俺はまだ、お前のことなんて認めてねえからな」

そういつて自分の席に戻った。

といつても…明野の隣。

ムカついて呟いた。

「なんでこんな女の隣なんだよ」

「悪かったな、うちだって嫌やわ」

一個前の席で真が笑いながら言った。

「素直じゃねえなあ」

俺と真とあいつ

※

授業中、俺は何か明野のほう気になって、声をかけてみることにした。

何やってんだ、俺……。

そんなの、わざわざ自分から地雷を踏みに行ってるようなもんじゃねえか。

心のどこからか、そんな声が聞こえてきたが、俺は自覚する前に、もう声をかけていた。

「お前さ、何か変だよな」

沈黙。

あ、またため息つきやがった。

「アンタらがおかしいねんで。

特に、えっと……アンタさ、名前は？」

なんだよ、偉そうに。

って…俺人のこと言えねえよな……。

「小林……陽」

下の名前、言おうか言わまいか迷ったけど、一応言った。

また沈黙。

「ふーん……」

小林……か

真が言うてたんと同じ人やね。

自己中。ナルシスト。人を見下す。

ある意味完璧やね」

そう言っつて、明野は笑った。

俺は、何故だろう…

ムカつかなかった。

ムカつく代わりに、

ムカつく代わりに……

そいつの笑顔に……。

……恋？

「お前さあ……人に名前聞いてて、自分は言わないわけ」

俺は聞いた。自分の中の変な気持ちを紛らわすために。

「ついさっきみんなの前で自己紹介したばかりやん…。

明野 美雪。人の話を聞かない。あんたの欠点その5」

知ってる。明野の名前くらい知ってる。

さっきまで、ついさっきまであんなに悪い仲だったのに、
何で今こんなに俺らは話しているのか……。

「そういえばさっき言ってたような気もするな。
どうでもいいけど」

「どうでもええんやったら最初から聞かんかったらええのに」

また悲しそうな顔をする。

そんな顔……しないでくれよ。

チャイムが鳴った。

いつの間にか50分も授業を受けていた。

今日は昼までなので弁当は食わずに帰る。

「起立。気をつけ。礼」

普通の挨拶をしてから俺は教室を出た。

それにしても、何で俺はあんな奴のことが気になるのか。

しかも転校してきた初日に。

どうかしてるな、俺。

ため息が出る。

「おい。陽一。帰ろーぜ」

「おう」

真が俺の肩をつかんだ。

※

帰り道、やたらと俺らは会話が少なく、妙に気まずかった。

沈黙の中、それを破ったのは真だった。
なんかニヤニヤしてる。

「お前、ちよつと美雪のこと気になりだしたんじゃないか？」
「……は？」

俺は心のうちを見透かされないようにと平然をよそおってみた。
しかし、「は？」の声が裏返ってしまい、とんでもない声になってしまった。

「ばっかじゃねえの。
何、気取ってんだよ。」
「は？ とか言いやがって。」

真が笑った。俺も笑った。

二人で、笑った。

「お前が明野に惚れてた理由がちよつとだけ、
ほんのちよつとだけ、分かった気がする」

「そっか。
でも俺はもう未練とかねえから…。」

でもさ……」

急に真が真顔になる。

「お前、皆本と別れねえ方がいいんじゃない？」

「なぜに？」

「だから……」

美雪が、ひどい虐めに会うかもしれねえだろ。」

少し考えて俺は呟いた。

「大丈夫だ。

明野は、負けねえ」

そう言って歩き出す。

「おい、

何気に俺のセリフ、パクんなよ」

真が後ろから鞆を振り回して追いかけてきた。

俺とあいつと過去

※

いつの間にか、次の日になった。

いつもより気分が良かった。

昨日より、明野に会いたくなった。

明野のこと、好きじゃないのに。

別になんとも思っていないのに。

明野の虐められてる姿が、気になって仕方なかった。

そんな自分に腹が立った。

けど、そんな自分を止めることはできなかった。

教室に入ると、いつもと違う光景が……

寢室が明野を虐めている光景が……

俺の目に飛び込んでくるはずだった。

……沈黙。

俺の目に映った光景。

明野が寢室の胸ぐらを掴んでる光景。

俺には理解できなかった。

何で、反対なわけ？

「お前みたいなもん……消えてしまえばええ」

低く、ドスの効いた声で呟く明野。

冷静を保っているようだが明らかにキレてる。

何があったんだ？昨日一日だけじゃ分からないが……

俺が見る限り、明野は少しくらいのことでは感情を表に出さない女だ。……と思う。

「なあ……明野ってよくあんな感じなのか？」

隣でその光景をじっと見ている真に聞く。

「俺が知ってる限り……あいつが女子の胸ぐらを掴むなんて

……あの事件以来だ」

最後の言葉は消えてしまいそうなくらい小さな声で。

すごくつらい過去を背負っているといわんばかりの声で……。

でも俺はその過去が知りたくなった。

「あの事件って、なんだよ」

俺が聞くと、真は一回だけ深呼吸して俺の目を見た。

「事件っていうかまあ……覚悟して聞けよ」

「俺がまだ大阪に住んでるとき、あいつ……美雪と
同じ中学校だったとき………」

真は静かに話し出した。

※

中学校のときの明野はかなり明るくて、
みんなからの信頼も強かった。

無口という言葉からはかなりかけ離れていて、

いつも明野の周りには友達がいたという。

そして、真はその明野を好きになったらしい。

でも明野はこのころ、恋愛とかそういうものには興味がなく、
真が自分に興味を持っているとは知らなかったそうだ。

明野は誰の悪口も言ったことが無かった。

それだから明るくて、だれからも好かれていた。

でも、違った。

大阪にもいるみたいだ。

いじめとかそういうのを楽しむ奴らが。

明野はそいつらの標的になった。

理由は

調子に乗っているから。

普通に学校生活を送っていた明野は、

一回も調子に乗ったことなんて無かった。

いじめる奴らもそんなこと百も承知だった。

ただ純粹でみんなから人気のある明野が
うらやましくて憎かっただけ。

自分勝手な理由で明野を締めようとした。

次の日から、明野の周りには友達が居なくなった。

だれもその虐めている女子を恐れて明野に近づこうとしなかった。

でも明野は全く動じなかった。

変わった様子は無かった。

一人、明野のそばを離れない人が居たから。

間宮 萌美。 明野の大親友だそうだ。

みんながどんなに明野に冷たくしても、間宮だけは

明野のそばを離れなかったという。

明野は間宮に支えられて、明るさをなくさなかった。

——しかし、最悪の事態はおこった

明野を虐めている女が、

間宮をも虐めようとした。

明野ははじめそれに気づかず、

いつもどうり間宮と一緒に居たという。

そして、ある日の朝、

移動教室に行こうと誘ってきた間宮の頬に

擦り傷があるのを見た。

問い詰めると、それは、ナイフで切られた跡だと分かった。

そのときに明野はキレたという。

間宮を虐めた女のところへ行って胸ぐらを掴み、

「殺してやる」と本気で言ったそうだ。

今まで明野が見せたことの無かった、
怒りだった。

「……ってわけだよ」

真が呟いていた。

「それで、先生が止めたんだけど、
胸ぐらを離す前に明野は大声で叫んだ。

あたしは虐めてもええけどな、
あたしの友達いじめたら
お前ら絶対殺すからな

ってな」

俺はしばし呆然としていた。

「すげえ友達おもいなんだな」

ポツリと呟く、俺。

「ところでさ……今何が起こってんの??」

俺がもう一度呟く。

明野がこんなに怒ってるのも何かがあったからだろう。

それに答えるように、明野が大声を出した。

「この学校に萌美が登校しとるそうやんけ。
それをお前らは? 虐めてるやと?
あんな奴の命どうでもええやと?!
この世に生を受けたものでな、どうしてもええ命なんて
お前らの命ぐらいじゃ、ボケェ!」

叫びを聞いて、真が、「あ」ともらした。

「そういえば……この学校にちよつと前
間宮って奴いたなあ……………」

しみじみ言う真にあきれた。

「つて、そんなことしみじみ言ってる場合じゃねえだろうが！」

「じゃあどうすればいいんだよ」

「その間宮って奴呼びに行ったらいいんじゃない？」

「何組かわかんねえし。」

「つかお前どんだけあつくなくてんだよ」

……ハツとした。

ほんとだ。なんで俺はこんなに熱くなってるんだ。

昔（昨日まで）の俺は何事にも冷めてたじゃねえか。

俺は、明野という存在に振り回されてる。

※

いつの間にか、次の日になった。

いつもより気分が良かった。

昨日より、明野に会いたくなった。

明野のこと、好きじゃないのに。

別になんとも思っていないのに。

明野の虐められてる姿が、気になって仕方なかった。

そんな自分に腹が立った。

けど、そんな自分を止めることはできなかった。

教室に入ると、いつもと違う光景が……

寝室が明野を虐めている光景が……

俺の目に飛び込んでくるはずだった。

……沈黙。

俺の目に映った光景。

明野が寝室の胸ぐらを掴んでる光景。

俺には理解できなかった。

何で、反対なわけ？

「お前みたいなもん……消えてしまえばええ」

低く、ドスの効いた声で呟く明野。

冷静を保っているようだが明らかにキレてる。

何があったんだ？昨日一日だけじゃ分からないが……
俺が見る限り、明野は少しくらいのことでは感情を表に出さない女だ。…と思う。

「なあ…明野ってよくあんな感じなのか？」
隣でその光景をじっと見ている真に聞く。

「俺が知ってる限り…あいつが女子の胸ぐらを掴むなんて
……あの事件以来だ」

最後の言葉は消えてしまいそうなくらい小さな声で。

すぐくつらい過去を背負っているといわんばかりの声で…。

でも俺はその過去が知りたくなった。

「あの事件って、なんだよ」

俺が聞くと、真は一回だけ深呼吸して俺の目を見た。

「事件っていうかまあ…：覚悟して聞けよ」

「俺がまだ大阪に住んでるとき、あいつ……美雪と
同じ中学校だったとき……」

真は静かに話し出した。

※

中学校のときの明野はかなり明るくて、みんなからの信頼も強かった。

無口という言葉からはかなりかけ離れていて、

いつも明野の周りには友達がいたという。

そして、真はその明野を好きになったらしい。

でも明野はこのころ、恋愛とかそういうものには興味がなく、真が自分に興味を持っているとは知らなかったそうだ。

明野は誰の悪口も言ったことが無かった。

それだから明るくて、だれからも好かれていた。

でも、違った。

大阪にもいるみたいだ。

いじめとかそういうのを楽しむ奴らが。

明野はそいつらの標的になった。

理由は

調子に乗っているから。

普通に学校生活を送っていた明野は、

一回も調子に乗ったことなんて無かった。
いじめる奴らもそんなこと百も承知だった。

ただ純粹でみんなから人気のある明野が
うらやましくて憎かっただけ。

自分勝手な理由で明野を締めようとした。

次の日から、明野の周りには友達が居なくなった。

だれもその虐めている女子を恐れて明野に近づこうとしなかった。

でも明野は全く動じなかった。

変わった様子は無かった。

一人、明野のそばを離れない人が居たから。

間宮 萌美。 明野の大親友だそうだ。

みんながどんなに明野に冷たくしても、間宮だけは
明野のそばを離れなかったという。

明野は間宮に支えられて、明るさをなくさなかった。

——しかし、最悪の事態はおこった
明野を虐めている女が、
間宮をも虐めようとした。

明野ははじめそれに気づかず、
いつもどうり間宮と一緒に居たという。

そして、ある日の朝、
移動教室に行こうと誘ってきた間宮の頬に
擦り傷があるのを見た。

問い詰めると、それは、ナイフで切られた跡だと分かった。

そのときに明野はキレたという。

間宮を虐めた女のところへ行って胸ぐらを掴み、

「殺してやる」と本気で言ったそうだ。

今まで明野が見せたことの無かった、
怒りだった。

「……ってわけだよ」

真が呟いていた。

「それで、先生が止めたんだけど、
胸ぐらを離す前に明野は大声で叫んだ。

あたしは虐めてもええけどな、

あたしの友達いじめたら
お前ら絶対殺すからな

ってな」

俺はしばし呆然としていた。

「すげえ友達おもいなんだな」

ポツリと呟く、俺。

「ところでさ……今何が起こってんの??」

俺がもう一度呟く。

明野がこんなに怒ってるのも何かがあったからだろう。

それに答えるように、明野が大声を出した。

「この学校に萌美が登校しとるそうやんけ。

それをお前らは? 虐めてるやと?

あんな奴の命どうでもええやと?!

この世に生を受けたものでな、どうでもええ命なんて
お前らの命ぐらいじゃ、ボケェ!」

叫びを聞いて、真が、「あ」ともらした。

「そういえば……この学校にちよつと前
間宮って奴いたなあ……………」

しみじみ言う真にあきれた。

「って、そんなことしみじみ言ってる場合じゃねえだろうが！」

「じゃあどうすればいいんだよ」

「その間宮って奴呼びに行ったらいいんじゃない？」

「何組かわかんねえし。」

「ってかお前どんだけあつくなってるんだよ」

……ハッとした。

ほんとだ。なんで俺はこんなに熱くなってるんだ。

昔（昨日まで）の俺は何事にも冷めてたじゃねえか。

俺は、明野という存在に振り回されてる。

俺とあいつと痛みと絆（前書き）

そうでもないけど、

2%暴力的な感じが入るような

入らないような??（どっちだ

俺とあいつと痛みと絆

何やってんだ、俺。

もう、俺意味わかんねえよ……
自分が分からない。

なんで明野のことになったら熱くなってるんだ。

馬鹿じゃねえか、俺。

茜が間宮って奴を虐めている。

あいつは人の悪口言ってたからな……。

悪口王で有名だったし。

人虐めることも平気でする奴だったからな……

そういえばよく言われたっけ…

「陽と茜はお似合いだ」
って……

てことは、俺もそういう冷たい人間なのか。

気づかなかったわけじゃない。

認めたくなかっただけ。

自分がどれだけ馬鹿か分かった。
権力なんて馬鹿みたいだとかは思ってた。

でも、自分勝手なんだ、俺は。

だから仕方ねえよ……

自分の感情に入り浸っていると、
突然教室のドアが乱暴に開いた。

「美雪！！！！」

静まり返る。

誰だ……？

また明野がそれに答えるように言った。

「……萌美……」

「もうやめて！」

「うちのために美雪までそんな……」

「萌美、何言うてんの！！」

「アンタはうちの親友やねんで！！
「うちが守らな、誰が守るの！！」」

茜は呆然としていた。

明野の顔を見て。

何も言わず、ただ明野を見ていた。

自分を恥じるような顔で。

明野を見ていた。

「……ごめ…ん……なさ…い」

耳を傾けないと聞こえないくらいの声で、
茜がつぶやいた。

その声はだんだん大きくなっていく。

「あたし、人の気持ち考えてなかった。

ごめんなさい、もう何もしないから。

……約束する。もうしない。何もしない。

明野さん……ごめんなさい…それから、ありがとう」

明野が掴んだ手をおろす。

「それから……」

明野が手を完全に離したことを確認してから
茜はひとこと言った。

「今のは、うそ！」

——バシィッ！——！！

茜が明野をビンタした。

「調子乗ってんじゃないわよ」

そういつて、明野をあざ笑った。
静まり返った。

音がしない。

俺の中で、何かが起こった。

何かが。

俺は自分自身を止める暇もなく、進んだ。

茜のところへ。

バシィィつつつ!!

今は茜をビンタしてやりたかった。

殴ってやりたかった。

茜に、分かってほしかった。

明野の気持ちを。間宮の気持ちを。

何故だろう。

俺は人のために傷ついたりしないはずなのに。

この胸の痛さはいいんだだろう。

傷ついてるんだ。胸が。心が。

俺は茜のほうに近づいていく。

完全に茜の前に立って、右手を振り上げた瞬間、

バシイイイッツツツツ！！！！

これくらいの勢いはあっただろうか。

茜はビンタされた。

俺……はまだ殴ってない。

右手が上がったままだ。

誰が……ビンタしたんだ。

明野か？

それとも……………

俺と真と怒りとビンタ

俺の前に立って息を荒くしていたのは、真だった。

「やめたほうがいいんじゃない?」

静かに真が言う。

明らかに、キレている。

完全に頭にきている。

なぜだ。真だってこんなに不器用じゃなかったはずだ。

なのに……なぜ…。

明野の力って、すげえのかもしれない。

「……痛……。し、ん……君?」

茜が動揺している。無理も無い。

真はクラスメイトにキレたことがない。

怖い。真がキレたら怖い。

何が起こるか、分からない。

「明野が切れる前に、俺が先にキレたほうが
いいと思ってよ」

薄笑いを浮かべながら真がいった。

「お前さあ。

この前言ってたよなあ。

陽に逆らう奴以外は絶対に絞めない。約束する。って」

「え……あ……その……」

「これってさあ、約束破りなんじゃねえの」

真顔に戻る。

「そのくせして何で間宮虐めてんだ？　なんで美雪殴ってんだ？
あ？」

胸ぐらを掴む。

怖い。俺さえ怖いと思った。

「ちょ、待ちい。真」

美雪が口をはさんだ。天の救いだ、と俺は思った。

真にあれ以上切れられたらとんでもないことになる。

茜の胸ぐらから真の手が離れる。

「大阪だな、やっぱ。すぐに口をはさみやがる」

「黙り。あんたには関係ないこととちゃうの？
あんたが皆本さんを殴る権利ないんよ？」

それを、あんたは」

パンツ

ビンタ。

真が顔をしかめる。

「女の子殴ってどないすんの、アホ」

「……………」

真は黙ったまま引き下がった。

明野。明野美雪。

こいつの力はすごい。

今まで見てきた中で一番すごい。

俺とあいつと罪と先生（前書き）

俺のクラスに存在する「権力」。

そのクラス全員の気持ちを180度変えた人物。

美雪？ 真？ 茜？ ……俺？

さあ、誰だ？

俺とあいつと罪と先生

「あたしは悪くないから。

あんたが悪いんだよ。

あんたがこの学校に来なかったら

あたしと陽は別れなくてすんだのに！！

あんたのせいで……あんたのせいで！！」

茜が叫んだ。

ほとんど悲鳴に近い。

「あたしは本気で陽が好きだったのに。

陽が望むことならあたしは何でもできたくらい

陽のこと、好きだったのに。

陽があたしのこと道具みたいに使ってるってことくらい
分かった。

あたしは陽にとっておもちゃみたいな存在だってことくらい
分かった。

でもね、それでもいいから陽のそばにいたかったんだよ
なのに……なのにあんたは……」

茜の声は俺の胸に突き刺さり、ちくりと痛かった。

「なんやそれ……」

茜の言葉をさえぎり、明野が言った。

「自分のした事全部水に流して、人に罪なすりつけて、なにがあんたのせいや。冗談も程々にしとけ。廊下にたたき出すぞ」

「明……野」

「明野、もうやめろ」

俺と茜の声が重なった。

「もう……やめてくれ」

俺の心はだんだん罪悪感で満たされていく。

茜のあの言葉から。

『陽があたしのこと道具みたいに使ってるってことくらい分かったた。』

あたしは陽にとっておもちゃみたいな存在だってことくらい分かったた。

でもね、それでもいいから陽のそばにいたかったんだよ』

その言葉が何度も何度も頭の中で繰り返す。

自分が怖くなった。

茜に謝ろうと思った自分が怖くなった。

「全部……俺が悪かったから。」

俺が悪いから……

もう、これ以上茜を責めるのはやめてほしいんだ」

俺が初めて謝った瞬間だった。

「よ……う……?」

茜が首をかしげる。

無理もない。

「俺は……バカだったから。

俺に権力を握る資格は

ない」

自分でも驚いた。

こんなに自分を責めることができるということに。

明野が呟いた。

「何よ……あんた」

「……………え……?」

戸惑う俺。

怒りの表情で見つめる明野。

「気付くの遅すぎやねん！
バカっ！！

あんたがもつとそのことに
早く気付いてたら……………
誰もこんな風に傷つく事は
……………なかった……のに」

下を向いて唇をかみしめた。

キンコンカーンコン…

チャイムが鳴り響いた。

先生が教室へ入ってくる。

「何をしてるんだ。早く席につきなさい」

めがねを軽く押し上げて先生が言う。

こいつ……

今まで俺達がしてたこと

全部知ってるくせに………

全部、全部見てみぬふりかよ。

大人なんて嫌いだ。大嫌いだ。

俺はこんな大人にはなりたくない、絶対に。

でも、こんな大人に俺は、なりかけてるんだ。

逆らえなかった。

俺達は席に着いた。

明野は何事も無かったかのように
歴史の準備をしていた。

茜はまだ落ち着いていないようだ。

涙が絶えず下に落ちている。

先生は、それも無視。

「無視ですか」

明野が呟いた。周りに聞こえるくらいの大きさで。

「明野、何か言ったか??」

あざ笑うかのように先生が聞き返す。

明野の口がフツと笑った。

「無視ですか。

私達がいまこうなってるのに
すべて無視ですか。

へえ、さぞかし楽なもんですね、大人の世界は。

どんなことでも自分さえ良ければいいんだから。

先生は、金目当てでこの学校の教師になったんでしょ、
そうでしょう。

だったら話ぐらいしますよね。

いい加減にせえ、ドアホ」

一番最後の言葉には、関西風のドスというモノがきいていて、威圧感があった。

先生が、半歩後ろへ下がる。

「明野、先生になんてことをいうんだ」

「ほら、そうやって逃げる」

すかさず答えた。

「明野。ふざけたことを言うな。」

先生は見つめふりをしているわけじゃない。君たちで解決してくれることを願って……」

「ええ加減にせえて、言うとするやろ？」

関西人、なめとつたらあかんぞ?？」

明野が、またキレそうになる。

「ああ、もういい！」

先生がかぶりをふる。

「そうですよ、先生はずっと見て見ぬふりをしていました。あなたたちのくだらない見栄の張り合いなんていちいち関与して、首が飛んだらかないませんかからね」

「くだらねえだ?!」

俺が大げさに立ち上がる。

「ええ、くだらない。くだらないにも程がある。
だいたい、権力なんてなんですか、それは。
君たちはまだ17なんだ。
成人にもなっていないくせに、大人を気取って
権力だなんだとぐだぐだ言ってる暇があるのなら
勉強したらどうですか」

大きく息を吸ってもう一度俺らのほうを向く。

軽くめがねを押し上げた。

「君たちは大人をなめきっている。
そんな君たちに大人を気取る資格などない!!」

「まったく、こんなくだらないことに
なんでなめんなとかドアホとか言われないといけないんですか
君たちね、先生をなめてるくせに
なめるななんて言う権利はありませんよ？」

君たちの事を考えてるのは

この私。先生なんだよ」

そういつて大きく息をついた。

みんな静まり返って

誰一人口を開く者はなかった。

また、めがねを押し上げる。

「授業を、始めます……あ、そうだ」

先生はほんの少し、微笑んでこういった。

「先生は軽い気持ちで教師という道を選んだんじゃないのだよ、明野さん。」

さ、号令は？」

俺とあいつと屋上と悲しみ

俺は素直に立ち上がった。

「気をつけ 礼」

そういうと、先生はいつもの無表情に変わった。

この瞬間、このクラス全員の気持ちが変わった。

明野でもない、もちろん俺でもない

みんなが当てにならないだろう
と思っていた

俺達の前に立っている
この先生が

俺達を

変えたんだ。

チャイムが鳴り、先生が教室を出て行った。

その顔にはさっきのような

熱い表情はなく、いつもの何も考えていないような表情だけがあった。

先生が出て行くと、誰かが大きくため息をついた。

それに続いて、たくさんのため息が教室を包んだ。

「マジで、俺ら先公のこと…
なめてたんだな」

真の声。賛同のため息。

「やっぱさ…
権利とか…そういうのって…
いらなと思う…だってさ、
あたしらだって自由に自分の意見とか
尊重したいじゃん??」

いつも静かに意見なんていわないようなやつが、静かに呟いた。

「……だよな」

真がまた呟く。

「あたし達、大人の力をなめてるよね。
いや……なめてた、よね」

茜。

俺の心の中はゆれていた。

みんな、はじめからこうしていれば
さっきのようなことは起きなかった。

俺が全部悪いのか。

俺が…全部…？

「ありえねえ…」

つい言葉に出してしまう。

「え…？」

みんながいつせいにこっちを向く。

「ありえねえんだよ！！」

なんで俺が全部悪いんだよ
ふざけんなよ

そんな気持ちで俺の中を渦巻いていた。

いつのまにか
教室のドアを蹴飛ばし、

俺は屋上に来ていた。
久しぶりに屋上に来た。

そこから見える景色は素直に綺麗だと思えた。

何やってんだ：俺。

みんなに迷惑かけてんじゃないか：

現実逃避してんじゃないやねえよ。

今まで自分勝手して

人をなめきって。

なのになんでこんなに逃げてんだ。

……最終的に全部自分に返ってきた。

「はあっ……」

大きなため息をついたすぐ後に

入り口のドアのあく音が聞こえた。

「あんた、なにしてんの？」

……なんで来るんだよ。

「綺麗やねえ、景色」

「ん……」

「あんた、それでええの？
現実から目そらして、ええの？」

「……………」

「だれだって、神様じゃないんよ。
間違いは犯す。でも、それを反省して
やり直すんよ」

一呼吸おいてから、明野はそっと呟いた。

「あんたは、最低な人間じゃない。
もちろん最高な人間でもないよ。
でも、これだけはいえる。
あんたは、変われる」

俺はふっと笑った。
強がった。
もっと弱音を吐きたかった。
でもプライドが許さなかった。

「俺は変われねえよ。
もし変われたとしても、おれはこのまま変わろうとは思わないから」

明野の深いため息。

「嘘つきやね」

そういつて俺のほうを見てにっこり笑う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9885e/>

方言

2010年10月19日03時28分発行